令和元年度
児童・生徒福祉作文コンクール
入賞作品集

【福祉作文コンクール表彰式】

社会福祉法人　北見市社会福祉協議会

目次

はじめに …… 一頁
総評・審査員名簿 …… 二頁

【小学校低学年の部】

こうばばのお手伝い　高栄小学校一年　鈴木　信一 …… 三頁

【小学校高学年の部】

やさしい心　北光小学校六年　北嶋　詩織 …… 四頁
障がい者の話を聞いて　北光小学校六年　中原　寛菜 …… 五頁
北光タイムで学んだこと　北光小学校六年　岡田　紗佳 …… 六頁
障がい者と私　北光小学校六年　野田　佳暖 …… 七頁
皆平等　北光小学校六年　森田　天琉 …… 八頁
テルベさんの話を聞いて　北光小学校六年　福屋　蘭歌 …… 九頁

【中学生の部】

私の弟　北中学校一年　江刺　百々知 …… 十頁
笑顔を守っていくために　北中学校一年　佐藤　実弥 …… 十一頁
人々が安全に暮らすための社会へ　北中学校一年　千葉　信悟 …… 十二頁
差別　北中学校一年　西迫　美郁 …… 十三頁
これからの日本に向けて　北中学校一年　野村　柚果 …… 十四頁
福祉　北中学校一年　福岡　姫奈 …… 十五頁

【高校の部】

福祉に対する気持ちの変化……留辺蘂高等学校三年　今　すみれ……十六頁
「大人」の福祉と「子ども」の福祉……留辺蘂高等学校三年　佐々木　彩花……十七頁
母と同じ仕事を夢にする……留辺蘂高等学校三年　大場　諒真……十八頁
利用者さんの「犬」……留辺蘂高等学校三年　園部　幸人……十九頁
様々な視点から学ぶ福祉……留辺蘂高等学校三年　小野寺　真白……二〇頁
福祉作文コンクール実施要綱……二一頁

はじめに

学校現場での『総合的な学習の時間』は、平成１２年に導入されており、各学校現場においてボランティア活動などの社会福祉体験や高齢者・障がい者との交流が増えていることは大変喜ばしく思います。

国が目指す「地域共生社会」の実現に向け、誰もが住み慣れた地域の中で「ふつうに・くらせる・しあわせ」を築く地域福祉の推進が重要です。

そのためには、将来の地域の担い手となる子どもたちが、幼少期から福祉に触れ、優しさや思いやりの心を育むことが必要です。

こうしたことから北見市社会福祉協議会は、子どもたちに福祉への理解と関心を深めてもらうとともに、家族や地域の方々にも福祉意識を高めてもらうため、『児童・生徒福祉作文コンクール』を実施し、福祉関係団体で開催する「北見市ふれあい広場」で表彰式を行っております。

また、このコンクールは平成２８年度に策定しました『第３期地域福祉実践計画』を基に、「地域づくりを主体的に担う人づくり」として、福祉教育の取り組みを推進し、担い手育成を目指すことを位置付ける中で実施しております。

福祉作文コンクールの実施にあたりまして、市内の小中学校・高等学校の先生方並びに児童生徒及び保護者の方々に格別なご配慮とご協力を賜り、心より厚くお礼申し上げます。

本作文集を是非ご一読いただき、貴校の今後の福祉教育の取り組みに繋がることをご期待申し上げます。

結びに、本作文集の作成にあたり、多大なるご尽力をいただきました審査員及び関係者の皆様に深く感謝申し上げますとともに、今後の地域共生社会実現に向け、福祉教育の取り組みが一層推進されますことをご期待申し上げ、お礼のことばとさせていただきます。

令和元年９月吉日

社会福祉法人 北見市社会福祉協議会

会　長　　渡　部　眞　一

審　査　員　総　評

今年度は、小学生の部７９点、中学生の部１６点、高校生の部５点、合計１００点の応募がありました。

作文のテーマは、いずれも「福祉について考える」でありますが、全作品とも、授業や、身近な人との交流、対話などを通じて、自分が感じたり、考えたりした福祉を、題材として設定し、率直に自分の言葉で表現しており、福祉についての理解や関心が深まったことを伺わせる作品がほとんどでありました。

小学生低学年の部で最優秀賞を受賞した鈴木さんの作品「こうばばのお手伝い」では、他界された山形県のおじいちゃん、おばあちゃんとの心温まる交流が、生き生きと描かれており、空に浮かぶ雲を顔に例えるなどユニークな表現力で、今後、大いに期待したいと思います。

小学生高学年の部で最優秀賞を受賞した北嶋さんの作品「やさしい心」では、テルベの職員の方から聞いたお話から、障がいのある方への印象や接し方が一変し、身近な方との体験を対比させる全体的な構成が整っており、率直な表現が大変印象的でした。

次に中学生の部で最優秀賞を受賞した江刺さんの作品「私の弟」では、実体験を通じ、障がい者福祉を進めるためには同じ境遇の方や地域住民とのコミュニケーションが重要であると指摘されているほか、家族との会話の中で、福祉についての認識を新たにしたことが率直に表現されておりました。

次に、高校生の部で最優秀賞を受賞された今さんの作品「福祉に対する気持ちの変化」では、履修科目として福祉を選択した動機、履修課程を通じて、自分の中で、福祉に対する考え方が「大変さ」から「楽しさ」に変化したことがわかりやすく表現されておりましたが、施設訪問などの実体験を通じて、福祉を取り巻く課題や問題点の掘り下げ、今後の自身の目標などがもう少し具体的に表現されていればとの、今後への期待のコメントが審査員から寄せられておりました。

結びになりますが、惜しくも最優秀賞に届かなかった作品も審査結果はいずれも僅差で、どの作品も、福祉についての考え方を実体験や、身近な人との会話、交流を通じて自分の言葉で丹念に描かれており感心いたしました。

今後におきましても、この作文コンクールが、若年層の福祉に対する理解と関心をなお一層高める機会となることをご期待申し上げ、総評といたします。

受賞された皆さん、大変おめでとうございます。

審査員代表
北見市保健福祉部　部長　高田　直樹

令和元年度児童・生徒作文コンクール審査員	
氏　名	所属・役職
高　田　　直　樹	北見市保健福祉部・部長
尾　島　　康　人	北見市教育委員会学校教育部・指導主幹
仲　野　　悠　子	北見市心身障害者（児）団体連合会・理事
岡　田　　栄　敏	北見市民生委員児童委員協議会・会長
渡　部　　眞　一	北見市社会福祉協議会・会長

【小学生低学年の部】最優秀賞

こうばばのお手伝い

北見市立高栄小学校一年　鈴木　信一

ぼくのじじとばばの家は、山形にあります。昨年まで、光男じじちゃん（92）と、ゆきばばちゃん（93）もいました。でも、二人とも5月と10月に天国にいきました。

いつも山形に帰ったとき、ぼくはこうばばのお手伝いをしました。料理をおぼんにのせて、二人のへやに運びました。そして、二人にごはんをたべさせました。すごくゆっくりでした。でも、おいしそうにたべてくれました。二人は、「ありがどの」といってくれました。ぼくは、うれしかったです。

ばばは2年も毎日、二人のかいごをしました。ばばともっとあそびたかったです。でも、じゃまになると思ったので、いいませんでした。今は、いっぱいあそべます。でも、二人のお手伝いができなくて、ざんねんです。ときどきくもをみると、二人のかおににています。それをみると、うれしくなります。

【小学生高学年の部】最優秀賞

やさしい心

北見市立北光小学校　六年　北嶋　詩織

私は、今まで福祉のことをあまり知りませんでした。ですが、テルベから来てくださった障害者の山田さんのお話を聞くことで障害者の方々にたいしての思いが変わりました。最初は障害の方々を見たら、怖い、かわいそうなどと心の中で思っていました。ですがその思いが障害の方の心に深くきずがつき家にひきこもったり死んでしまいたいと思う人がいると聞き、私は深く反省しました。

よく考えてみると私の身近にも障害者がいました。それは私のおばあちゃんです。四年ほど前に脳出血と言う病気になり身体の左半分が麻痺して動かなくなってしまいました。病院へ行くと弱くなったおばあちゃんを見ておどろきました。あんなに元気だったおばあちゃん。急に別人になったように見えました。私は小さかったころのことなので状況がよくわかりませんでした。ですがいまはよくわかります。人はいつ病気になるかわからない。山田さんのようにいつ交通事故にあうかもわかりません。そしていつ自分が障害者になるか、それはだれもわかりません。でも私はだれが障害者になっても、特別あつかいはせずふつうの人間として、ほかの人と同じように接してみようと思いました。山田さんは病院で、「君の足はもう治らないかもしれない。」そう言われたそうです。私のおばあちゃんも「足はもう動かないでしょう。」そう言われました。ですがおばあちゃんは毎日がんばってリハビリをして、もう動かないと言われた自分の足と向き合いながらリハビリを続けた結果、つえで歩けるようになりました。トイレや家事。身の周りのことはほとんど自分で出来るようになりました。これは大きな奇跡です。他人から見たらそうでもありませんが、私たち家族から見るとすごく大きな奇跡です。

私たちには色々なことが待ち受けています。それをどう受け止めるかが大切です。私は人々にやさしい心が増えるように願っています。

優秀賞

障がい者の話を聞いて

北見市立北光小学校　六年　　中原　寛菜

わたしは、障がい者の話を聞いていた時にこのような事を思い出しました。

それは、前に、お買い物に行った時に車イスに乗っている人がいて、その人は何かをとろうとしているけど、おくにあってとれなくて困っていました。だけど助けてあげられませんでした、そして、ちがう人が助けてあげていました。わたしは、その時に何で助けてあげられなかったんだろうと今でもすごく後悔しています。でも、北光タイムの学習の中で、車イスの動かし方など色々な事を教えてもらった後、お出かけに行った時に、車イスに乗っている人がいて、つかれていたので、助けることができました。その時、ありがとうと言われてとてもうれしかったし、助けてよかったと思いました。

障がい者の方が日本人の6～7％いるそうです。それは日本人の百人のうち、六人が障がい者なのです。自分の周りにもたくさんの障がい者がいるのだと思いました。

また、山田さんの話を聞いてこのような事を思いました。山田さんは、事故にあってしまい、お医者さんから、あなたの足は一生動きませんと言われたそうです。わたしだったら、悲しすぎて、一歩も外に出られなくなると思います。山田さんは、外に出て車イスを使ってできる事を探したそうです。それが車イスでスポーツをすることです。色々なスポーツができていて、実際に見ると、すごく上手でした。あと、車イスで仕事ができるテルベという会社もいったそうです。わたしは、その話を聞いた時、すごいなと思いました。このように、障がい者は、何もできないのではなく、山田さんみたいに色々な事ができるのです。

わたしは、これから、交通事故にあわないよう、気をつけながら、どこかが不自由な方を助けていきたいと思います。

優秀賞

北光タイムで学んだこと

北見市立北光小学校　六年　岡田　紗佳

私は北光タイムで、車イスに乗ったりしてて、いろいろなことを学びました。いろいろな事を学んだ中で、一番学んだことは、車イスに乗っている人の大変さです。

北光タイムの学習で、車イスに初めて乗った私は、初めて車イスに乗っている人の大変さを知りました。車イス乗って、だんさのある道を通る時、私は友達におしてもらわないとのぼれませんでした。ガクンとなってびっくりした事をおぼえていたので、私が車イスをおしている時、乗っている人がびっくりしないように気をつけようと思いました。

その他にも、車イスに乗っている人が何千人もいるということがわかりました。なので私は、車イスに乗っている人がいたら「かわいそう」と思うのではなく、何かお手伝いできることがないかさがすことが大切だと思いました。そして、車イスに乗っている人には、やさしく声をかけてあげたり、車イスをおしたりしたいと思いました。

私は、しょうがいを持っている人と、しょうがいを持っていない人は、何がちがうの？と思っていましたが、福祉の学習をしてから、いろいろなことがわかりました。しょうがいを持っている人でも、スキーや、バスケ、マラソンなどのいろいろなスポーツができるということです。テルベのみなさんが来てくれた時にいろいろ話してくれました。一つ目は、しょうがいを持っていても通勤できることです。二つ目はノーマライゼーションという、しょうがいのある人も、ない人も、互いにささえ合い、地域で生き生きと明るく豊かにくらしていける社会を目ざすという考え方があることです。

私は、北光タイムの学習でいろいろなことがわかってよかったなと思いました。私は、北光タイムの学習やテルベのみなさんから学んだいろいろなことをしょうらいにいかしたいと思います。

優秀賞

障がい者と私

北見市立北光小学校　六年　野田　佳暖

私は総合学習の時間に車イスや障がい者のことなどを学びました。その中でも特にむずかしかったのは、自分で車イスを動かすことでした。最初はかんたんだと思うけど実際やってみると、あまり思うようには行かなくて大変でした。でも、少しずつやってみると、意外にできました。その時私はこう思いました。「自分でやるのはかんたんだと思ったけど、やってみるとかんたんじゃないんだなー。でも障がい者の人はもっと大変なんだなー」と思いました。

次に、テルベの方からお話を聞きました。中でも心に残っているのは、障がい者でもできる事はたくさんあると言うことです。障がい者の人でもスポーツができてすごいと思いました。その中でも心に残ったスポーツはバスケです。最初はバスケなんてできないと思っていたけどそれはちがいました。なんとバスケ用の車イスがあることです。最初のみた時はびっくりしました。この車イスを見る前はバスケはできないと思っていましたが、それはちがいました。この車イスを見た時障がい者でもできる事はあるとわかりました。でも実際やって見るととてもむずかしいことがわかりました。

次は、社会福祉協議会の皆さんがきた時です。

この時不安だった場所は、体育館の入り口の坂です。おす時は登るのはかんたんだけど下りる時はスピードがつくから止まるのが大変でした。逆に今度は、自分が車イスに乗っている時です。やっぱり登る時は怖くないけど下りる時は、おちそうになったりしそうだったので怖かったです。でも、社会福祉協議会の皆さんが声をかけたほうがいいよと言ったのでためしにやってみると、さっきより不安が減りました。この時は私はこう思いました。

「声をかけたりすると障がい者の人も安心する」ということがわかりました。私はこれからも障がい者と向き合って優しく接してあげたいです。

優秀賞

皆平等

北見市立北光小学校　六年　森田　天琉

僕が福祉を知ったのはこの学習をしてからです。

僕は前まで車イスにのっている人を「足が不自由なのか、かわいそうだな」と思っていました。

だけど山田さんの話をきいて車イスにのっている人がかわいそうだなと思わなくなりました。なぜかというと、車イスでも楽しく生きていけるかです。僕は足が不自由だとできないことがいっぱいあって、大変そうだと思っていた。だけど、足が不自由だって、車イスバスケだって、スキーだってマラソンだっていろいろなことができることがわかりました。足が不自由だって、けんじょう者と同じことができる！わたしたちと少ししかちがいはありません。それなのに、ぼくはしょうがい者は何もできない、かわいそうだな、という全くちがう考えを持っていました。

人はみんな苦手なことが一つはあるだろう。山田さんは苦手もしょうがいの一つだと言っていた。人はみんなしょうがいがある。ぼくの場合は漢字が苦手だ。その他にもかぞえきれないほどの苦手がある。だけど、みんなが苦手な事が同じではない。少しにている人もいるだろうが、ぜんぶ苦手が同じにはならないだろう。だから人は苦手を助け合うことが必要だと思う。

ぼくは、この学習で色々なことを学びました。障がい者でも、スポーツができる、はたらくこともできる、そしてなにより笑顔でいられる。ぼくは今、しょうがい者はなにもできない、かわいそうというかってな考えではなく、ぼくもできない事があるんだし、できない事があったら助けてあげようと思いました。今しょうがいがあって引きこもっている人もいるかもしれません。そんな時手をさしのべてあげられるのは、ぼくたちなのかもしれません。

佳作

テルベさんの話を聞いて

北見市立北光小学校　六年　　福屋　蘭歌

わたしは、テルベさんの話を、聞く前は障がいの人を見たら「かわいそうだな…」と思っていました。ですが、山田さんの話を聞いて考えが変わりました。

山田さんは、事故で、足が不自由になってしまいました。「一度死のうと考えたことがある。」と言われてびっくりしました。そんなにつらいものなんだなと思いました。でも山田さんは、車いす生活をしている人が、障がいの無い人と同じように、スポーツをしていると知り考えがかわったと話してくれました。そして、ノーマライゼーションという言葉を教えてくれました。その言葉は「障がいのある人も無い人もおたがいに支えあう」という意味でした。私は、その言葉を聞いて、「いい言葉だな」と思いました。そして、その言葉のようになりたいと思いました。

お話を聞いたあとに、バスケ用の車いすと、マラソン用の車いすに乗せてもらいました。私はバスケ用の車いすの方にいきました。最初は車いすなしでシュートをうちました。私は、はずしてしまいました。そして次は、車いすに乗ってみたら、目せんがとてもひくくてびっくりしました。そして、シュートはかすりもしませんでした。次はドリブル体験でした。それは私はやりませんでした。ですが見るからにむずかしそうでした。そして、山田さんがとてもディフェンスがうまくて、びっくりしました。見ているだけで楽しかったです。山田さんは一度死のうと思うほど辛かったのにここまでがんばれたのは、山田さんがおれずにがんばりつづけたからだと思います。私が山田さんの立場だったらがんばれなかったと思います。なので山田さんはすごいと思います。

そして、私はこの経験を生かして、人を助ける仕事をしたいと思いました。

【中学生の部】最優秀賞

私の弟

北見市立北中学校　一年　江刺　百々知

私の弟は、発達障害です。この作文をきっかけに一人でも多くの人に発達障害のことを知ってもらいたいと思い、最初は少しとまどいもありましたが書くことにしました。

発達障害といっても色々な特性があり、それは人によってさまざまです。私の弟は、「自閉症スペクトラム障害」と呼ばれるもので自閉症、ＡＤＨＤ、ＬＤを合わせもった障害です。とはいってもこの障害のことを知っている人の方が少ないと思います。

弟は、小学校で特別支援学級に在籍し、放課後はデイサービスに通っています。今は、旭川の病院に三か月に一回通っていますが困っていることなどをすぐに相談しに行くことができず不便を感じています。近くに相談しに行けるような場所があれば、障害をもつ人や障害をもつ人の親同士が自分の好きな事や悩みを相談する機会にもなるので、少し気持ちも楽になると思います。さらに、地域の色々な人達との交流があれば障害についてもっと知ってもらうことができるし、それを機に一人一人が自分にできることを考えるきっかけになればいいと思います。

私も、最初は理解できず弟とけんかになったり、なぜ親からの私と弟への接し方が違ったのかと不満に思い家族に強くあたってしまったりすることもありました。でも、今回この作文を書くにあたって両親から話をきいたり本を読んだりして、弟が少しでも過ごしやすいようにしたいと思うようになりました。ストレスにならないような、分かりやすく優しい接し方を心がけたいです。

弟の夢は、コンビニで働きながらユーチューバーをやることです。弟が将来の夢に少しでも近づけるように、私は全力で応援していきたいです。発達障害だけじゃなく、他の障害で困っている子達が楽しく過ごせるように福祉が少しでも役に立てればいいと思います。

優秀賞

笑顔を守っていくために

北見市立北中学校　一年　佐藤　実弥

五月一日、「令和」という新しい時代が幕を明けた。私のひいおばあちゃんは、大正時代に生まれ、昭和、平成、そして令和の四つの時代を生きてきた。今年で九十四歳になる。

ひいおばあちゃんは、何年も前から認知症で、時々会いに行くと、何度も私に同じことを聞いたり、日常生活で色々なことをすぐ忘れてしまうけれど、一緒に暮らすおじいちゃんとおばあちゃん二人のサポートを受けて一日一日を笑顔ですごすことができている。

色々なことを忘れてしまうひいおばあちゃんが、絶対に忘れないことが一つある。それは、鏡の前でお化粧することだ。髪も素敵にセットすると、カラオケや買い物をしに出かける。

ひいおばあちゃんがこんなにも元気で楽しい人生を送ることができるのは、サポートするおじいちゃんとおばあちゃんの工夫がたくさんある。一つは、薬を飲み忘れないように表を見える所にはっていること。二つ目は、忘れやすい事の注意書きがある。三つ目は、食事でのどがつまらないよう、すごく注意している。一番大切だと思うのは、できることは自分でやらせるということ。例えば洗たくや部屋のそうじ、洗いものなどのことを自分でやっている。

今のひいおばあちゃんの楽しい生活があるのは、たくさんの人の助言を受けたからだ。ひいおばあちゃんの生活を支えていくため、たくさんの人が考え、協力してくれた。

しかし、ひいおばあちゃんのように家族がサポートできる環境にない人もいる。その人たちも、毎日安心して暮らせる社会が実現するように、自分に何ができるか、考えていきたい。

最後に、はなれて暮らすひいおばあちゃんの笑顔いっぱいの生活を守っていけるよう、私も家族の一員として、自分のできることをして支えていきたい。

優秀賞

人々が安全に暮らすための社会へ

北見市立北中学校　一年　千葉　信悟

僕は今まで、自分の暮らしは不便と感じずに暮らせているので、ずっと今の暮らしが当たり前だと思っていました。

例えば車。小学生の頃、僕は、車に乗ったり降りたりするのは、少し力がいるなと思い「お年寄りの人や車いすの人は、大変だ」と思いました。ですが時間がかかっても乗ったり降りたりすることは、できないということではなく、それは普通のことだと思っていました。しかし、それは普通のことではないということに気づかせてくれた出来事が二つあります。それは、お年寄り、車いすの人、そして体の不自由な人には、僕が当たり前だと思っている生活は当たり前にできるわけではなく、世界には不自由で、危険な環境があることに気づかされた出来事でした。

あれは、出かけた時のことでした。僕と母が車から降りると、車いすの人が降りにくそうにしてうまくいすを組み立てられずにこまっていた時、それをみた母がはしって行き、困っていた車いすの人のいすを組み立てたら車いすの人は車いすに乗りました。僕は、この時、車いすの人は毎日苦労して生活しているのだと思いました。もし、僕が車いすの人だったら、とてもあせったと思います。

僕は、とっさに助けることができた母がすごいと思いました。

このことから、世の中の基準とは、世の中の人々が安心して暮らせるように考えることではなく、健康な人が基準で作られているのだと思いました。僕は、不自由な生活をしている人が社会を、もっと不安や不自由のない、安心した生活のできる社会にしていくべきだと思います。それに、個人の力では、できないことを助ける道具や組織を、積極的に作っていく必要もあると思います。こういった人々にとって使いやすいユニバーサルデザインなどを今よりも増やし、どんな人も安心に暮らせる社会を作っていくのが必要だと思います。僕も自分にできることを行動にできる人間になろうと思います。それに、だれもが自分の生活を当たり前と思えるみんなに優しい社会にしていこうと思います。

優秀賞

差別

北見市立北中学校　一年　西迫　美郁

障害のある人と聞いて、どう思いますか。自分とは違うところがある人、そう思う人は少なくはないでしょう。

これは私が母と、家の近くのスーパーにいった時のことです。足が悪いのか、周りとは、違った歩き方をしている人がいました。周りにいた人がヒソヒソとその人を見ながら話をしていました。私は、この光景を見た時こんなことをする人がいるなんて信じられないし許せないと思いました。

この作文を書くにあたって差別について考えてみました。

私は、自分とは違うと思うこと自体が差別だと思います。この世に生きているのはみんな同じ人間なのに、見た目が違うから変わっていると、思う人がいます。なぜそう思うのでしょう。自分だって違うところがあるし、顔だって一人一人違います。世の中には自分と違うそれだけの理由で必死に生きている人を否定する人がいます。自分と違うそれだけで差別をしていい理由になりません。

世界には、パラリンピックという大会があります。パラリンピックは、体に障害のある選手が、それぞれの条件で力を競い合う大会です。

私は、パラリンピックを見た時、衝撃を受けました。パラリンピックに出ている人は障害のある人です。けれど、そんな事を感じさせないくらい生き生きしていました。手や足に障害のある人が出ていました。その人たちは手や足以外の全身を使って競っていました。

障害のある人は私とは違います。不自由で私よりできることは少ないのに、不自由のない私より体を上手に動かしています。このように障害のある人が戦っているところをみていると障害という言葉は、ないような気がします。私は、色々な人にパラリンピックを見て同じように感動してほしいと思いました。

私は、何不自由のない体で生まれ、何不自由ない生活をしています。だから、障害のある人の辛さや苦労は、わかろうとしてもわかるものではないと思います。

だからこそ、一人がわかろうと努力をすることで、差別はなくなるのだと思います。

優秀賞

これからの日本に向けて

北見市立北中学校　一年　野村　柚果

私は、今まで福祉のことについて考えたことがありませんでした。なぜなら、毎日困ることなく、楽しく幸せに暮らせていたからです。ですが今回、福祉のことについて考えてみると、自分が思っていたこととは違い、自分にも関係あることだと感じました。

私が、今まで思っていたこと福祉は、高齢者や、障害を持つ人などが、介護をしてもらったり、補助してもらいながら暮らしたりすることでした。ですが、本来の福祉は、「満ち足りた生活環境」を表す言葉でした。

私は、最近おばあちゃんの足腰が弱ってきている気がします。そのため、一緒に買い物に行った時には荷物を持ってあげたり、おばあちゃんの速さに合わせて歩いたりと、少しでも楽になってもらおうと心がけています。他にも、冬になると親せきのおばさんの家の雪かきを手伝ったりしています。このように、福祉について知ると、自分も身近なところで小さな活動をしていたんだと、気付くことができました。

しかし、これではまだ満足して暮らせていない、充実した生活ができていないという人がいると思います。そのような人がいない社会を作っていくには、どのような福祉活動を行うと良いのでしょうか。私は、一人一人が、小さくても良いから、少しでも多く、たくさんの活動をすれば良いと思います。例えば、バスで席をゆずってあげたり、高齢者や車イスの人などが困っていたらドアを開けてあげるなどです。そのような人が増えると、自然と多くの人が笑顔になれるはずです。

私は、将来誰もが満足した生活環境で暮らせる社会、福祉社会を実現できるようにしたいです。そのために、自分自身も今よりも生活しやすくできるようにし、身近にいる困っている人がいないようにするため、福祉活動を少しでも多くできるようにします。いつ何が起こるかは誰にもわからないので、みなさんも、より多くの福祉活動をできるよう、心がけてみましょう。

佳作

福祉

北見市立北中学校　一年　福岡　姫奈

福祉とは、老人、障害者などの意味を持つ人が多いと思いますが老人、障害者という意味ではありません。福祉とは、人のお手伝いすることや、自分が出来ることに最善をつくすことです。

私はアルツハイマー病のひいおばあちゃんがいます。アルツハイマー病というのは認ちしょうの人とほとんどしょう状の変わらない病気です。私のひいおばあちゃんはもう少しでし設に入ってしまいます。私はその間自分ができることを少しでもいっぱいできるようにと思っています。私は忘れてしまったことをまた教えてあげること、もう老人なので歩くことのサポートをしてあげることが私にとって最善をつくすことだと思っています。これが福祉です。

私にはもう一人福祉をしてあげたい人がいます。その人は私のお母さんです。いつもいっしょうけん命家事をしてがんばっています。毎朝、毎晩ご飯をつくってくれたり、洗たくをしてくれたり、家のそうじをしてくれたり毎日仕事もしてがんばってくれています。たまには私や兄弟がおこらせてしまうこともあります。そんな毎日をすごしているお母さんに福祉をしてあげようと思いました。私は家事の手伝いをできるときにやってあげようと私は考えました。そうすればお母さんが少し楽になるのではないかと、私は主にお風呂洗いをして、手伝ってあげようと思います。それを実行すると喜びであふれた顔になることを予想します。私は人に喜んでもらうことがとてもうれしいです。なぜなら私のささいな行動、思いで人を笑顔にし、楽にさせてあげられるからです。みなさんも困っている人、大変な人を笑顔にさせてあげてください。たった一人が福祉を行うことでそれをみていた人が真似をし、日本だけではなく世界に広がると私は思っています。

【高校生の部】最優秀賞

福祉に対する気持ちの変化

留辺蘂高等学校　三年　今　すみれ

私は、留辺蘂高校で福祉を選択して学んでいます。はじめになぜ私が福祉を選択したのかというと、将来に役立つと考えたからです。もし、将来、自分の身近な人に介護が必要となったときに福祉の知識をもっていることで手助けすることができると考えました。

しかし、わたしは介護に対して「大変」という印象が強くありました。それは、私の祖父や祖母が病院で介護されているのを間近でみてきたからです。でも、このことが、私が福祉を学ぼうと思った理由にもなっています。

そして、留辺蘂高校で福祉を学んでいくにつれ、私は福祉に対して「楽しい」という印象をもつようになりました。そう思うようになったきっかけは、高齢者の方たちとの交流です。インターンシップや福祉の授業の一環で、福祉施設を訪問しました。そこで、たくさんの利用者の方と触れ合うことができました。また、施設を訪れた際、施設の方たちと一緒にビンゴ大会をしたことがありました。そこでの交流が、私が福祉を楽しいと思うようになったきっかけです。そして、私たち高校生が来たときに、利用者の方たちが喜んでくれたのが、とても印象に残っています。私は、この交流を通して介護は大変なだけではなく、利用者の方たちと思い出を共有したり感情を分かち合ったりという「福祉の楽しさ」を学びました。

今後、授業で福祉を学んでいく際、私は福祉には「大変さ」だけでなく、「楽しさ」もあるということを忘れずに取り組んでいきたいです。また、福祉を学んでいることで、普段生活しているなかでの人の関わり方について考えさせられ、福祉の知識が日常生活に生かされます。

福祉を学ぶことで将来役立つことがたくさんあると思うので、多くの人に福祉に関心をもってもらいたいです。

優秀賞

「大人」の福祉と「子ども」の福祉

留辺蘂高等学校　三年　佐々木　彩花

私は、将来子どもに関わる仕事に就きたいと思っているので、高校では、福祉と保育の授業を頑張っています。これらの授業で私が感じとった「大人」の福祉と「子ども」の福祉について述べてきたいと思いました。

そもそも福祉とは何か考えたとき、一番に頭に浮かんだのは高齢者の介護、つまり「大人」の福祉でした。一方、子どもの福祉とは何か考えたとき、やはり子どものお世話などが頭に浮かびました。

いっけん、子どもと大人の介護やお世話は全く違うと思いがちですが高校で福祉を学ぶにつれて、共通点はあるということに気づきました。大人と子どもでは、身長や体重も違いますが、オムツを取り替えたり、ごはんを食べさせたり、お風呂に入れたり共通点ばかりなのです。

特に、印象に残っている授業は、子どものオムツの吸収量と大人のオムツを実際に穿きベッドの上で寝返りをうったり普段高齢者の方が体感していることを実際に体験したことです。子供用オムツの吸収量は大人用に比べ少ないものの、いずれにせよ背中がかぶれてしまい、体を傷つけてしまうおそれがあることを知りました。オムツ交換の大切さを実感しました。

また、「ベビーマッサージ」の授業では、ベビマセラピストの方から実際に赤ちゃんの模型を使って、手技を教えてもらいました。この活動をする中で、同様のことが高齢者介護の中にもできるのではないかと感じました。以前、コミュニケーションの授業で触れ合うことの大切さを学びました。まさにこの手段は高齢者や障がい者などの大人にもつかえると実感したのです。「愛着」「信頼関係」を築く方法として共通しています。

今後のこれからの学習を通して、「それぞれの福祉」について考え、将来こども関係の仕事に就いた時、この両方の視点を役立てていきたいと思います。

佳作

母と同じ仕事を夢にする

留辺蘂高等学校　三年　大場　諒真

私は介護の仕事がしたい。小さな頃から母親が福祉の仕事をしているのを見ていたせいかもしれないが、中学生の時まではそれほど興味はなかったかもしれない。中学3年生の頃に、地元の留辺蘂高校が福祉の勉強ができることを知り、少しずつ将来について考えはじめたとき、福祉の仕事でもいいかなと思い入学を決めた。

入学後は2年生になって選択科目が増え、ほかの人より多くの福祉の科目を勉強した。できないこと、わからないことも多く、テストでは勉強したのにもかかわらずいい点数をとることはできなかった。

そのとき、母親になかなか自分が力をつけられないことを相談すると「最初から福祉のことが全部わかる必要はない。福祉の仕事は、仕事をしてからわかることもたくさんあるよ。高校では、少しだけでもわかっておけば、働いてからでも学べるよ。」と励まされ、また、母親がたのもしく見えた。

3年生になってからは、わからないことは積極的に先生にきいて頑張っている。そして、がんばりたい気持ちといっしょに母親と同じ仕事がしたいとはっきり思えるようになっていた。

私は、明るい笑顔が自分のいいところだと思っている。自分ではあまりそうは思っていなかったけど、まわりの友達はそういってくれるので、その笑顔を介護の仕事でもいかしていきたいと思う。

将来、母のように福祉の仕事を一生懸命できるように残りの高校生活を大切にがんばっていきたい。

佳作

利用者さんの「犬」

留辺蘂高等学校　三年　園部　幸人

私が福祉の道を歩むきっかけは精神障がい者や認知症の人、そして体が不自由になった年配の方々とうまくコミュニケーションをとることが出来なかったことです。また、この機会に、うまくコミュニケーションが出来るようになりたいと思い福祉の道を夢見るようになりました。

最初の頃はまだ漠然としていて、介護や障がいというものがよくわかっていないことが多かったのですが、2年次のときに行かせてもらった福祉施設でのインターンシップを通して、考え方が大きく変わりました。初めは緊張していて、またうまくコミュニケーションがとれないのではないかと不安になっていたのですが予想以上に、利用者さん達はみんな明るく、お話し好きで、とても障がいを持っている方達とは思えないほどでした。また、自分の中での「障がい」という言葉はどことなく暗いイメージがあったのですが〝パッ〟と真逆になりました

実習が終わり課題点や疑問点がいくつかありました。最近ではとある福祉施設へ実習する機会があり、そこである利用者さんが犬を紹介してくれるという事で見させてもらった時のことです。それはおもちゃの「犬」でした。その時の利用者さんは「この犬たちかわいいでしょ、よく吠えたりするのよ、おすわりとかも出来るのよ。」と明るく言ってくれていたのですが、その後に「電池で動くけどね。」と言われた時に、思わず言葉を失ってしまいました。おもちゃの「犬」を本物として話を進めればいいのかそれともおもちゃとして話を進めればいいのかまったくわかりませんでした。

今後私は、この体験のように福祉のちょっとした「矛盾」のようなものを見つけていきたいと思います。例えば先ほどの「おもちゃ」としてか、「本物」としてなのか、より適切なコミュニケーションの方法を突き詰めていくことがよりよい介護士への近道なのだと考えています。

佳作

様々な視点から学ぶ福祉

留辺蘂高等学校　三年　小野寺　真白

皆さんは「福祉」という言葉を聞くと何を思い浮かべますか？私はそう聞かれるとまず思うのは「介護」や「お年寄り」を思い浮かべます。もちろんこの二つも福祉だと思うのですが、それ以外にもあるということに気がつきました。留辺蘂高校では、福祉の授業時間に、教科書だけではなく、読書やＤＶＤを見て知識や理解を深める機会があります。

そこで私は今まで見たり読んだりして、深めた知識をまとめていこうと思います。

特に、私が読んだ「はせがわくんきらいや」という絵本はたいへん印象的でした。この本は作者の実体験が基になって書かれています。始め読んだ時はあまり福祉に結びつきがないと思っていました。しかし、あとがきを読んで一つの事件が作者を障がいのある人にしてしまったことがわかりました。そこで私は一つの事件とは何か気になり、インターネットで調べることにしました。調べてみるとこの事件では沢山の人が事件に巻き込まれていました。その記事にはどんな障がいを抱えてしまうかも書かれていました。いくつかの例をあげると知的障害や脳性麻痺などがありました。その記事を読んでから本を読み返してみると違う見方ができるようになりここでやっと福祉に関係していることに気付きました。

福祉の勉強は教科書だけではなく、私の身近にたくさんの教材があります。本だけでなく、実生活でも福祉を意識するようになりました。これからも福祉を意識しながら生活し様々な視点で福祉を見つめていけるようにしたいです。そして、学んだことをこれから社会にでたときにいかせていければいいと思います。

～福祉啓発事業～

令和元年度 児童・生徒福祉作文コンクール実施要綱

1．趣　　旨

小・中学校・高等学校の児童・生徒の福祉への理解と関心を深め、家庭や地域の福祉意識を高めるとともに、福祉教育の一層の推進を図ることを目的として福祉作文コンクールを実施します。

2．主　　催

社会福祉法人　北見市社会福祉協議会

3．後　　援

北見市
北見市教育委員会
北見市心身障害者（児）団体連合会
北見市民生委員児童委員協議会

4．募集期間

令和元年５月２７日（月）から７月１７日（水）まで

5．応募対象者及び方法等

【作文部門】

（１）応募対象者　北見市内の小・中学校及び高等学校に通う児童・生徒

（２）題　　材　本要綱の趣旨に添う内容で、自分の体験や身近な事柄に対する感想、意見などを述べた未発表の作品

（３）原　　稿　400字詰め原稿用紙に黒のボールペン又は、鉛筆（B）を使用し、住所・氏名・学校名・学年を必ず記入し、事務局へご応募下さい。
字数は、小学生低学年（１～３年生）は300字～400字以内、小学生高学年（4～6年生）から高校生は、700字～900字以内（厳守）とします。（作文の題と学校名・学年・氏名は字数に数えません）
※字数制限にご注意下さい。

（４）応募点数　１人１作品

（５）応募方法　各学校で取りまとめた上で、別紙「令和元年度児童・生徒福祉作文コンクール応募者名簿」に記入の上、応募作品を添えて応募願います。

6. 部門及び賞

（1）部　門

① 小学生低学年の部　②小学生高学年の部　③中学生の部　④高校生の部

（2）各　賞

① 最優秀賞　　1点
② 優 秀 賞　　2～3点
③ 佳　　作　　3～5点程度

※　入賞した方には賞状と図書カード、その他参加者全員に参加賞を進呈いたします。

7. 審　　査

（1）審　査　員

令和元年度児童・生徒福祉作文コンクールの主催者及び関係者による審査を行ない、入賞者を決定します。

（2）審査の視点

① 福祉の視点を持ち、共感や感銘が得られるもの。
② 学年に応じた表現力があり、論旨が一貫しているもの。
③ 自分の体験や身近な事柄に対する感想・意見であるもの。

8. 入選発表

各学校を通じて入賞者へ通知します。

9. 表 彰 式

（1）「令和元年度児童・生徒福祉作文コンクール」表彰式

と　　き　令和元年8月25日（日）
と こ ろ　ふれあい広場会場ステージ上
※受賞者には、表彰式のご案内をします。

10. そ の 他

（1）応募作品は各学校に返却します。
（2）入賞作品の著作権は、全て主催者に帰属します。
（3）今回ご応募いただいた方の個人情報は、本コンクールの運営管理に使用する他、次のものに使用します。

① 入賞作品文集へ氏名及び学校名・作品、表彰式写真を掲載し、市内全学校へ配布。
② 社協だよりへ氏名及び学校名、表彰式写真を掲載し、全戸配布。
③ ホームページへ氏名及び学校名・作品、表彰式写真を掲載。
④ 報道機関へ氏名及び学校名・作品、表彰式写真の情報提供により掲載。

＜応募先＞
〒090－0065　北見市寿町3丁目4－1　北見市総合福祉会館内
社会福祉法人 北見市社会福祉協議会 地域福祉課
ボランティア市民活動センター　TEL 0157－61－8181
FAX 0157－61－8183

令和元年度

児童・生徒福祉作文コンクール

入賞作品集

令和元年９月

編集　北見市社会福祉協議会

【北見市社会福祉協議会　地域福祉課　ボランティア係】
北見市ボランティア市民活動センター
〒090-0065　北見市寿町３丁目４番１号
TEL　0157－61－8181　　FAX　0157－61－8183
ホームページ　http://www.kitami-shakyo.or.jp/
メールアドレス　vola-senter@kitami-shakyo.or.jp